

京極読書新聞 <第40号>

発行日 平成24年 12月 1日(日)
京極町生涯学習センター湧学館

読書の季節を楽しもう！

京極小学校、南京極小学校への出前図書館

読書の秋から一転。季節は一気に「雪の女王」が支配する冬になってしまいました。でも、暖かいストーブがあるから大丈夫！ 冬休みもどんどん本を読みましょね。10月19日の南京極小学校、11月15日の京極小学校(1年生・2年生)では、今までの出前図書館とはちょっとちがうスタイルの出前が行われましたので、そのご報告です。(新谷)



京極読書新聞は
毎月1日発行です。

▲ブックトーク後、思い思いの本を手にする児童たち。
お互いに本を見せ合う姿も見受けられました。

京小出前図書館

「かっこいい読書感想文の書き方」&ブックトーク

京極小学校。まず、過去に京極町読書感想文コンクールで最優秀賞をとった作品を読んでみました。たとえば2年生では、浜田広介作・岩崎ひろ絵の「りゅうのめのなみだ」です。その後、最優秀賞の読書感想文も読んで、どうやったら「かっこいい読書感想文」になるか、みんなで考えてみました。それから、いつもの出前図書館。おもしろい本がどんどん登場するブックトークという組み合わせです。場所も、いつもの音楽室からプレイルーム(おじさんの時代には学校にこういう場所ありませんでした…)に変わって、フレッシュな気分になる出前図書館でした。



<2校時> 2年生・ブックトーク「お仕事の本」 (湧学館・櫻)

▼みなさんこんにちわ。11月23日勤労感謝の日です。芸能発表会でピアノを弾く人もいますよね。そこで今日は、色々な「お仕事」の出てくる本を紹介します。

▼1冊目は女の子に人気のケーキ屋さんが出てくるお話。「しほちゃんのシフォンケーキ」。ケーキ作りが好きなしほちゃん、ある日ケーキ屋さんを始めます。ケーキは大人気!でも、あまりに売れるので作るのが追いつきません。ついしほちゃんは倒れてしまいます。ケーキ作りに一生懸命のしほちゃんと家族のお話。

▼次の本では、働くのはなんと犬です。「犬の国ピタワン」。

犬の国ピタワンでは、犬たちが好きなことを仕事にしています。主人公のバンボも、自分の好きなことを仕事にします。なんのお仕事かは読んでからの楽しみ。とにかく犬がいっぱい出てくるので、犬が好きな人にお勧めの一冊。



▼次は、ちょっと変わったお仕事が出てきます。

「パパのしごとはわるものです」何のお仕事をしているかパパは教えてくれません。こっそり仕事場についていくと、なんとパパは悪者レスラーだった!でも、パパは悪者であることを大切に思っています。どんな仕事にも役割があると教えてくれるお話です。



▼最後に紹介するのは、みんなにいつも勉強をしてくれる先生の出てくる本です。「サリバンせんせい」。

このお話は、昔のアメリカで本当にあったお話です。サリバン先生は、目も消えない・耳も聞こえない・口もきけないヘレンという女の子の家庭教師です。甘やかされて育ったヘレンは、先生のいうことを聞きません。でも、先生のおかげで、ヘレンは歴史に名を残すすごい人になります。

▼他にもいろんなお仕事の出てくる本を持ってきたので、ぜひ読んでみてください。

<3校時> 1年生・ブックトーク「リスとドングリの本」(湧学館・櫻)

▼一年生の皆さんに紹介するのは、この京極にも住んでいる動物、「リス」の出てくる本です。京極では神社のあたりによくいるみたいですね。今日はリスだけじゃなく、ドングリの出てくる本も紹介しますよ。

▼まずはこの本「こりすのおかあさん」

動物たちは、「お母さんにいじわるすると、お母さんはもう帰ってこない」といいます。それを聞いた子リスはあわてて家に帰ります。お母さんにいじわるをしてしまったからです。リス以外にも動物がたくさん出てくるお話です。



▼次の本にも、リスのお母さんが出てきます。

「子リスのアール」。子リスのアールはお母さんに自分でドングリを見つけてくるよう言われます。しかし、アールはドングリがどこにあるのかわかりません。を探すアールがとてもかわいい、思わず応援したくなるおはなしです。

▼本の中では、ドングリも立って歩いてしゃべります。

「どんぐりむらのぼうし屋さん」。3人(粒?)のドングリたちは帽子屋さんをしています。でも、なかなか帽子は売れません。張り紙をしたり、他の場所に移動したり、帽子を売るためにドングリたちはいろんなことをします。お話の後半には、面白い帽子もたくさん登場します。みんなが好きな帽子もあるかもしれません。

▼最後に紹介するのは、北海道に住んでいるリスの出てくるお話。「エゾリス」。

もうすぐ北海道は寒い寒い冬です。その間、リスたちがどうやって食べ物を手に入れるのかを描いた本です。絵がとても綺麗で、まるで本物のリスのようです。京極にいるエゾリスたちも同じように食べ物を探しているのでしょう。冬の日を外を見てみてください。もしかしたら、リスがいるかもしれませんよ。



南京小+湧学館で 大ブックトーク大会！！

全員でやりました！

南京極小学校では、全生徒と湧学館が競演する大「ブックトーク」大会が行われました。かねてより、南京小では生徒が湧学館の人たちの真似をして、自分たちでブックトークをしているという話は耳に入っていたのです。ぜひ見たいと思っていたのですが、ついにその夢が実現です。なにか、小人たちの家にまよいこんだ白雪姫みたい。こうやって、みんなで面白い本を見つけてゆけば、いつかおじさんたちを超える日がきっと来るよ。その日が楽しみです。



余談「平清盛」(11)

<『平家物語』を読む会> 講師 村山 功一(むらやま・こういち)

田中真紀子文科相が石原前東京都知事を“暴走老人”と言って話題となりましたが、暴走老人の本来本元は平清盛でしょう。『平家物語』が描く晩年の清盛の暴走ぶりは、じつに見事です。むしろ爽快にさえ感じます。その暴走を必死で止めようと努力し、苦悩するのが嫡男の重盛です。今回はその重盛をとりあげたいと思います。といっても、重盛の“人物像”的なものではなく、ドラマの重盛の“台詞(せりふ)”を問題にしてみました。

全体的にみて<ドラマ・清盛>の台詞は、いかにも平安時代を思わせる雰囲気や漂わせつつ、現代の私たちにも分かり易いという点でよく出来ていると思います。ただ、2回ほど、何となく引っ掛かる台詞に遭遇しました。いずれも重盛の台詞です。

その一つ。「忠と孝とはさまで ~重盛泣く」とタイトルの付いた第43回。場面は“鹿が谷の陰謀”の陰に後白河院ありと判断した清盛が、院を逮捕・幽閉しようと出陣準備をしているところに、重盛がやって来て涙ながらに父の暴挙を止めようとするシーン。この際、重盛は「ちゅうならんとほっすればこうならず、こうならんとほっすればちゅうならず、しげもりしんたいここにきわまれり」と口にします。もちろんこれは<忠ならんと欲すれば孝ならず、孝ならんと欲すれば忠ならず、重盛進退ここに窮まれり>と書きます(1)。ではなぜこの台詞に違和感を覚えたのでしょうか。まず、この発言が古文そのままだったからです。そもそも、古文の“会話”は話し言葉そのものではなく、話し言葉に似せた書き言葉、つまり“会話文”です。ところで、この部分以外の登場人物の台詞は、古文そのものではなく古文風の現代語に“加工”されています。その中で、この部分に限って古文そのままだったのが戸惑った訳です。

でも、そればかりではありません。何となくこの部分の台詞が、他の部分になじみません。その原因はこの部分は重盛自身の発言であるにもかかわらず、“直接話法”になっていないからではないか、と考えました。特に「……窮まれり」の部分です。この台詞は、父清盛の行為に対して子の重盛が意見を述べるのであるから、主語は重盛です。「……窮まりて候(そうろう)」であれば、直接話法と言えるでしょう。これでもまだ古文のままなので、

「……窮まっております」「……窮まてしまいました」などとすれば、さらにいいと思います。『平家』のこの部分(巻二「烽火之沙汰」)は、名場面の一つです。重盛が清盛を必死に説得する言葉は、長大で漢文、和文を織りまぜた格調高い発言です。これはふつうの“会話文”ではなく“演説体”と呼ばれる『平家』の特徴ある文体の一つなのです(2)。そういう文体の一部分だけをそのまま台詞として発言したために、この部分だけが浮き上がってしまったのではないのでしょうか。

もう一つは、第44回「重盛逝(ゆ)く」の一場面。病篤い重盛を抱き起こし「しっかりとしろ、重盛」と呼びかける清盛に対し、苦しげに声を絞り絞って「疾(と)く、死なばや(早く死にたい)」と言います。これも前述同様古文そのままの発言です。さらに、重盛の言葉とされているこの言葉は、『愚管抄』(巻五)にく(重盛が)トク死ナバヤ、ナド云ト聞ヘシ」と伝聞として引用されている言葉です。そのためにやはり、何となく違和感を覚えた訳です。これも「疾く、死なばやと存じ候」などとすれば、清盛の呼びかけに答える直接話法になるのではないのでしょうか(3)。「……存じ候」は「……存じます」でいいでしょう。

時代劇、歴史ドラマの台詞作りはなかなか難しいと思います。その時代らしさを出しながら、現代の視聴者に分かり易い話し言葉(会話体)にする必要があります。『平家』は今から約800年前の言葉で書かれた作品です。しかも、<独立して確かに会話の文だと認められるものが少なく一中略一地の文の中に織り込まれた形式のものが大部分>という特徴的な文体から、当時の話し言葉を復元し台詞を作り出すのは至難の技でしょう。幸い<ドラマ・清盛>の台詞は、全体的によく出来ていると思います。

(以下次号)

【注】

- (1) 「忠ならんと…」の一節は、江戸期の儒学者頼山陽が『日本外史』に、重盛の言葉として書いたもの。以後、こちらの方が有名となり一般に普及した。
- (2) 西田直敏/著『平家物語の国語学的研究』和泉書院
- (3) 重盛がこのような発言をしたといわれるのは、ドラマのように死の床にあってのことではなく、それ以前熊野に参詣し清盛の悪心を和らげ、一門の繁栄を神仏に祈った時のこと。

発行

京極町生涯学習センター湧学館
〒044-0101 京町字京極158番地1
TEL 0136-42-2700(代表)
FAX 0136-42-2032
E-Mail yugakukan@town-kyogoku.jp



ホームページもご覧ください
<http://lib-kyogoku.cubet.com/>

